０７／０１／１４　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：神と格闘した人
聖書箇所：創世記　２７－３６章

今日は旧約聖書の中の一人の人物について学んで行きます。神と格闘した人、ヤコブです。このヤコブについては創世記の中に、どんな人物であったか、どんなことをしたのかを見ることができます。彼については創世記２７章から３６章までに記されています。非常に長い箇所です。私たちもこのヤコブのことはいろいろな機会を通して学んでいますが、いくつかのことを復習してみましょう。

ヤコブという人物、彼は信仰の勇者に数えられていますが、私たちと同じ弱さをもった人でした。様々な罪を犯し神に逆らった、私たちと同じ罪人でした。ヤコブが彼の両親、イサクとリベカとともに過ごしていたときは、残念ながら、彼の生活は私たちが見ても魅力のないものでした。どんな人物であったか、簡単に言います。彼は非常に野心的でした。野心家だったのです。というのは、自分の兄エソウから長子の権利を奪おうとするのです。パンとレンズ豆の煮物をもってそれを奪おうとしたことが記されています（創世記２５：２９－３４）。また、彼は父イサクからエソウへの祝福を横取りしてしまいます。その際に、彼の母リベカがいろいろな策力を練るのです。どうすれば兄の祝福を横取りすることができるかと。後になって、彼は自分の伯父ラバンのところ、つまり、母の里に戻るのです。そこで、一生懸命働くのですが、その動機、目的は自分のためでした。同時に、非常に罪深い人でした。すべてのことを挙げるわけにはいきませんが、先に言ったように、彼は父イサクをだますのです。エソウのような身なりをしてエソウのかおりのする服を着てやって来るのです。どうでしょう？年老いて盲目に近い父親をだますなど、何ということをするのかと思います。そのようなことを母親の勧めがあったにせよ彼は行なっても、聖書を見る限り彼は罪悪感を感じていません。彼は偏愛の人でした。というのは、後半になって彼に１２人の子どもが生まれるのですが、彼はその中で１１番目のヨセフを愛したのです。というのは、彼も自分の母親によって偏愛されてきたのです。父親のイサクはエソウを愛しました。母のリベカはヤコブを愛したのです。すばらしい家庭ですが、問題があったことは事実です。

彼は非常に矜持心、自負心が強かったのです。自分の知恵や力に過信しています。神は見事にそれを砕いて行かれるのです。それを今から見て行きます。そして、反面、とても恐れやすい人でもありました。自分の兄が自分のいのちをねらっていると知ったとき、何とか逃げようとします、恐れがあったのです。ここまで見ると、確かに信仰の勇者として神はこの聖書の中に名前を挙げているし、人々はこのヤコブをほめたたえます。心から敬い尊敬するのです。しかし、そのヤコブも私たちと余り変わりません。これが聖書の真実さを明らかにしているのです。もっと彼を神格化してもよかった…、でも、彼の本当の人間的な弱さ、罪深さを聖書はきちんと私たちに教えてくれています。彼も私たちと同じような罪人に過ぎなかったのです。もう一つ、彼の特徴を付け加えるとするなら、残念ながら、彼は神を信頼していないのです。驚くことは、このイサクが与えようとした祝福というのは彼のものだったのです。彼が生まれるときからそのように約束されていたのです。ですから、待っていても自分のものとして与えられるにも関わらず、彼はそれを何とか自分の手で手に入れようとするのです。これがベエル・シェバという所にいたときのヤコブです。両親とともにいたときのヤコブです。まだ若いティーンエージャーではなかった、恐らくもう中年でした。そのような年齢であったにも関わらず、悲しいことですが、彼自身はこのような歩みをしていたのです。ヤコブという名前は「押しのける、だます」という意味をもっています。まさにその名にふさわしい生き方をしていた人物、それがこのヤコブでした。

しかし、驚くべきことは、このベエル・シェバを出たときから神のすばらしいレッスンが始まるのです。神はこのヤコブにすばらしい働きをされました。もちろん、彼がこのベエル・シェバを出るのも自分から進んでではありませんでした。自分のいのちがねらわれているというので彼はそこを出て行くのですが、神はそれを用いられました。あくまでこれは推測ですが、もし、彼がそこを出ないで両親の許にいたなら、彼は大切なレッスンを学ぶことがなかったでしょう。イサクもすばらしい勇者です。リベカも本当に美しいすばらしい妻だったと言います。ところが、どの家庭にもいろいろな問題があったのです。神はこのヤコブをこの家庭から連れ出します。そして、リベカが生まれたその故郷に、彼の伯父が住む町へと導いて行かれるのです。今日、私たちが見て行きたいのは、どのように神がヤコブを変えて行ったのかです。どのように神がこのヤコブを信仰の勇者へと変えて行ったのかです。なぜこのことが必要かと言うと、神は私たちにもそのように働かれるからです。神はあなたを変えて行かれます。キリストのすばらしさを証する人物として変えて行かれるのです。どのように神は働かれるのか見て行きましょう。

☆神はどのようにヤコブを変えて行かれたのでしょう？

非常に長い箇所なのでいくつかの箇所をごいっしょに見ながら、どのようなことが起こったのかをしっかり覚えていただきたいと思います。まず、創世記２８章を見てください。ベエル・シェバは死海の西、大体３０キロほど行ったところにあります。そこから７０－８０キロ北のベテルに向かってヤコブは進んで行きます。２８：５には**「こうしてイサクはヤコブを送り出した。彼はパダン・アラムへ行って、ヤコブとエサウの母リベカの兄、アラム人ベトエルの子ラバンのところに行った。」**とあり、そこへ向かって行くのです。彼らが住んでいたベエル・シェバからは恐らく７００キロ以上も離れた、その北東部に当たるガリラヤ湖のはるか北の場所へと彼は旅を始めて行くのです。２８：１０を見ると**「ヤコブはベエル・シェバを立って、カランへと旅立った。」**とあります。カランというのはパダン・アラム地方にある町です。１１節から**「ある所に着いたとき、ちょうど日が沈んだので、そこで一夜を明かすことにした。彼はその所の石の一つを取り、それを枕にして、その場所で横になった。:12 そのうちに、彼は夢を見た。見よ。一つのはしごが地に向けて立てられている。その頂は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしている。:13 そして、見よ。主が彼のかたわらに立っておられた。そして仰せられた。「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしはあなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫とに与える。:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西、東、北、南へと広がり、地上のすべての民族は、あなたとあなたの子孫によって祝福される。」**。彼が横になったところで彼は夢を見ます。神が先ず最初にこのヤコブになさったことは、主、神がどのようなお方であるかということを教えるのです。私たちがどの時代でもどこにいても、信仰において成長して行くために必要なことは、まず、神というお方を知らなければなりません。その正しい知識が信頼を増し加えて行くのです。神がどういうお方かを私たちが知れば知るほど、その方に対する信頼が増して行きます。ですから、神はヤコブにご自身がどういう神なのか、どういうお方なのかを正しく教えようとされたのです。そのことがこの箇所に出て来るのです。

◎神はどのようなお方か（創世記２８：１１－１４から）

１．<u>私たち人間に歩み寄ってくださる</u>　　１２節

１２節**「見よ。一つのはしごが地に向けて立てられている。…」**、はしごは天から地に向けて立てられています。神が私たちに近づいてくださるのです。神が私たちに目を留めてくださり、神が私たちに働きを為してくださるということです。神が私たちに対してそのように歩み寄ってくださるのです。感謝なことです。私たちが神の注意を引く必要などないのです。神の目を覚ます必要もないのです。神は常に私たちのことを見てくださるし、私たちに常に歩み寄ってくださるのです。

２．<u>ともにいてくださる</u>　　１３節

「主が彼のかたわらに立っておられた。」とあります。ヤコブはそのことを見せられるのです。神は遠い存在ではない、神は私たちとともにいてくださる、この教えは新約聖書でもみことばが教えることです。どんなときでも神がともにいてくださる、私たちは決して一人ではないとみことばは教えるのです。

３．<u>契約を守られる</u>　　１３節～

１３節に**「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。」**とあります。アブラハムに与えられた契約、その約束をこの神は守られるということです。その約束には三つのことがあります。土地のこと、子孫が増えること、そして、祝されるという約束です。再びこのことを神はここでヤコブに告げるのです。アブラハムに与えた約束をわたしは守ると、つまり、神は契約を守られるお方です。１５節を見てください。**「見よ。わたしはあなたとともにあり、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ戻そう。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」**と、今度は神はヤコブ自身に対して約束を与えるのです。どのような約束でしょう？

（１）<u>わたしはあなたとともにいてあなたを守り続ける</u>。

（２）<u>再び、カナンの地にあなたを連れ戻す</u>。

このようなことを神は最初にヤコブに仰せられるのです。この１３節に**「主が彼のかたわらに立っておられた。そして仰せられた。「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。」**とあり、この**「主」**というのは太字で書かれています。もう何度も学んでいるようにこれはヤーウェーです。主権者なる神です。ご自分の意志を実行なさる方です。ご自分のお考えを遂行なさる方です。誰の助けも必要ない、そういう神だということをここでヤコブに教えるのです。これを話しているのは主権者なる、絶対者なる神だと。これを聞いてヤコブはどのように感じたでしょう？その生まれ育った地を離れて来ています。初めての一人旅、私たちもそのことを想像したとき、いろいろなときに不安になります。淋しくなります。ホームシックになります。私も一人で世界を廻っているとき、あるときノルウェーの田舎に着いてバスを降りると夜中の１１時４５分でした。真っ暗でした。友だちはまだ来ていなかったのでどうしようと思いました。いろいろなときに私たちは家に帰りたいと思います。しかし、神のすばらしい訓練が始まったのです。ヤコブはその学校に入学したのです。淋しさを感じているヤコブに対して神は「わた

しはあなたとともにいる、あなたを守る、そして、必ずあなたをこの地に連れ戻す」と言われたのです。その約束を主なる、絶対者なる、主権者なる神が「わたし自身が為す」と言われた、ヤコブは何があっても生き延びるのです、そして、ここへ戻って来るのです。そのような強い励ましをヤコブは神からいただいて歩みを始めるのです。ヤコブに、心配しなくても良い、わたしを信頼し続けなさい、わたしが今言ったことをしっかり覚えていなさいと言われた神は、この大切なことをヤコブに教えた後、神はヤコブに対して信仰の実践の訓練を始めて行かれます。

目的地のカランに着きました。母リベカの生まれ故郷、伯父のラバンがいるカランです。そのことは創世記２９－３１章に出て来ます。この場所でヤコブはどのような経験をするのでしょう？

◎ヤコブが受けた信仰の実践のレッスン

１．落胆

自分の思う通りに物事が進まなかったのです。まず最初は結婚において、ラケルという非常に美しいラバンの下の娘、ヤコブは彼女と結婚したかったのです。それで約束通り７年間一生懸命働きました。ところが、ラケルと結婚できると思ったら、実は、姉のレアとの結婚でした。だまされたと…、これまでだましていた人がだまされたのです。そして、その後彼はまた７年間、このラバンのもとで仕えるのです。なぜ？と考えたことでしょう？なぜこのようにだまされるか、もしかすると、その時に人をだますことの罪の大きさを自分自身しっかり学んだかもしれません。落ち込んでしまった状態、彼は結婚だけではなく、報酬においても何度もだまされるのです。彼は２０年間このカランにいたのですが、そのうち１４年間は妻を得るために働き、６年間は家畜のために働きました。２０年間の滞在でした。その２０年間は彼のことばを借りると非常につらいものだったのです。そのような落ち込んだ状態、自分の思い通りに物事が進まない状態で、ヤコブは何をしなければいけなかったのでしょう？彼は神が与えた約束を覚えなければいけなかったのです。先に１５節で見たように「わたしはあなたとともにいてあなたを守る、あなたをもう一度カナンの地に連れ戻す」という神の約束を彼はどんなときにも忘れてはならなかった、たとえ、自分の思っていることが起こらなくても、願い通りに物事が進まなくても、彼はその中でその約束をしっかり覚えることが必要でした。神はヤコブに対していろいろな方法で「わたしはあなたを忘れていない」ということを教え続けられました。というのは、この２０年間に彼は豊かに祝されたのです。彼には１１人の子どもが与えられました。そして、大変な数の家畜が与えられました。２０年間の様々な出来事を通して落胆の経験を何度も繰り返したヤコブが学んだことは、そのように思い通りに物事が進まなくても、忍耐をもって主を信頼することが必要だということです。２０年は長いです。しかし、その時間が必要だったのです。ヤコブが、私のすべてを導いておられるのは絶対者なる、間違いを犯すことのない神だから、そのお方を信頼して行こう、この方は私を守り私に必ずもう一度あのカナンの地に戻ることを約束してくださったから、この主権者なる神を信頼して行こうとするのです。

実は、このレッスンは私たちにとっても大切なレッスンです。というのは、私たちの日々の生活において思い通りに事が進まないと私たちは落胆し、そのまま放っておくと私たちは神に怒りをもってしまうかもしれないからです。神がこのヤコブに教えようとされたことは忍耐です。神は決して間違いを為さる方ではありません。私たちに必要なことは神を正しく信頼して忍耐をもって主の最善のときを待ち続けて行くことです。

２．問題からの勝利

二つ目の信仰の実践のレッスンは問題からの勝利です。３１章に進むと、今度はラバンの息子たちがヤコブに対して嫉妬するのです。ヤコブだけが祝されている、ヤコブの持ち物がどんどん増え広がっているのを見て、もちろん、ラバンは分かっていました、神がヤコブとともにいるから自分たちも祝されていることを、しかし、ヤコブが豊かになって行くのを見たとき、ラバンの子どもたちはヤコブを妬み始めるのです。なぜ、ヤコブばかり…と。３１：２を見ると**「ヤコブもまた、彼に対するラバンの態度が、以前のようではないのに気づいた。」**とあり、ヤコブもまた何か問題があることに気付いています。そのときにヤコブはあいさつをすることもなく、ラバンの祝福をもらうこともなく、彼はその場所から逃げて行くのです。約束の地に帰るということは神がヤコブに約束したことです。ところが、ヤコブは正しい方法でその地に帰ろうとしなかったのです。問題が生じたから彼はそこから逃げます。そして、ギルアデの山地でラバンが彼らに追いつきます。その時のやりとりが３１章に出て来ます。ヤコブがここで学ばなければいけなかったことは何でしょう？皆さんにもう一度思い出していただきたいのですが、ヤコブに与えられた個人的な約束、それは、神はヤコブとともにいてヤコブを守ること、二つ目はヤコブを約束の地に連れ戻すということでした。だから、心配しなくてもよかったのです。必ず、神が神の方法で彼を連れ戻してくださるからです。ところがヤコブがしたことは、問題が生じたときに神のときを待たずに厄介な問題だとその問題から逃げようとしたのです。彼がここで覚えなければいけなかったことは、問題から逃げてはいけないということです。これは私たちも同じです。私たちの日々の生活におい

ていろいろな問題を経験するわけで、その問題一つ一つから逃げているといつまでも逃げ続けなければいけません。逃げるのを止めてしっかり神を信頼することです。なぜなら、その状況もすべて神はご存じだからです。ヤコブが二つ目に学ばなければいけなかったことは、問題から逃げてはいけないということです。問題から逃げずにたとえ結果的に一致しなくてもヤコブとラバンがしたように話し合って行くことです。そのことを彼はこの３１章の中で経験するのです。

ここでのレッスンはこの次にも続いて行きます。三つ目は、

３．恐れからの勝利

このことは３２章に出て来ます。ヤコブが旅を続けて行って、まさにこれからカナンに再び入ろうとするときです。彼らは死海の北、ガリラヤ湖と死海の真ん中より少し南に当たるところですが、その場に彼らは立つのです。ここで神が彼に言われたことはお兄さんのエソウと和解するようにということです。大変なことを言われたのです。ヤコブには一番聞きたくないこと、できるなら避けたいことでした。一番やりたくないことでした。その背後には彼には恐れがあったのです。神はそのこともすべてご存じなので、３２：１を見ると神の使いたちが彼に現われるのです。ヤコブが彼らを見たときここは神の陣営だと言ってそこをマハナイムと呼んだとあります。**「さてヤコブが旅を続けていると、神の使いたちが彼に現われた。:2 ヤコブは彼らを見たとき、「ここは神の陣営だ。」と言って、その所の名をマハナイムと呼んだ。」**。つまり、神はこのような恐れを抱いているヤコブのことを知って彼に励ましを与えるのです。まず、最初に神の使い、天使たちを見せます。ここで神の陣営だ、マハナイムと呼んだというのは、欄外の引照を見るとマハネの双数とあります。マハネというのは陣営です。それの双数、つまり、二つあるということです。自分たちの陣営ともう一つそれとは別に神の陣営がそこに存在していると言っているのです。つまり、そこでヤコブが何を見て何を教えられたのか、神はともにいるということです。ヤコブ自身に与えられた約束です。その通り、これからカナンの地に入って行こうとするときに、これからエソウと和解しようとするときに、心が騒いでいるときに、神が示されたことは「ヤコブよ、わたしはあなたとともにいる」です。皆さん、神はヤコブの弱さを分かっています、ヤコブの動揺を分かっています、ヤコブにどのような励ましが必要か分かっておられます。それで、わたしはともにいるから心配しなくても良い、これだけ御使いたちがいるからと、そのように神はヤコブを励ますのです。恐らく、ヤコブはそれによって大きな励ましを得たでしょう。神がともにいてくれるというのは大きな励ましです。

しかし、またヤコブの心を騒がせることが起こるのです。エドムの野、彼らがいたところよりもかなり南です。死海から東南の方です。そこにエソウがいたのです。ヤコブはそこに前もって使者を送りました。エソウに帰ってきたことを知らせるためです。何とか許していただきたいと思って…。ところが、その使者が戻って来てこのように言います。３２:６**「私たちはあなたの兄上エサウのもとに行って来ました。あの方も、あなたを迎えに四百人を引き連れてやって来られます。」**と。これを聞いたときヤコブはどう思ったのでしょう？ヤコブの心の中にはエソウが自分のいのちをねらっているという思いがずっとありました。だから、彼はカランへと逃れたのです。エソウは猟師だから生き物を殺すことは平気だし私を殺すことなどたわいもないことだと…。そのエソウが許しを求めたとき４００人を引き連れて迎えに来てくれる…、恐らく私たちと同じようにいろいろなことを想像したでしょう。最悪のシナリオを考えたと思います。もしかすると、兄は２０年経ってもまだ私のことを怒っていて、私を殺すために来ようとしていると。だから、ヤコブは陣営を二つに分けます。３２：７－８**「そこでヤコブは非常に恐れ、心配した。それで彼はいっしょにいる人々や、羊や牛やらくだを二つの宿営に分けて、:8 「たといエサウが来て、一つの宿営を打っても、残りの一つの宿営はのがれられよう。」と言った。」**、ヤコブは使者の報告を聞いたとき、これは大変なことだと心の中に大きな恐れが起こったのです。いつやって来るか分からない、夜中に奇襲攻撃されるかもしれない、彼の心には非常な恐れが溢れたのです。そして、ヤコブはこのような中で何をしたのでしょう？９－１２節に彼の祈りが出ています。彼はその恐れの中で神の前に立つのです。神に祈るヤコブは、（１）<u>神の約束に立つ</u>＝９節**「そうしてヤコブは言った。「私の父アブラハムの神、私の父イサクの神よ。かつて私に『あなたの生まれ故郷に帰れ。わたしはあなたをしあわせにする。』と仰せられた主よ。」**と、彼は神の約束に立つのです。神さま、あなたはこのように約束されましたねと言っているのです。（２）<u>神の前にへりくだる</u>＝１０節**「私はあなたがしもべに賜わったすべての恵みとまことを受けるに足りない者です。私は自分の杖一本だけを持って、このヨルダンを渡りましたが、今は、二つの宿営を持つようになったのです。」**と、彼自身の弱さ、愚かさを告白するのです。かつてのヤコブではなかった、自負心をもって自分の力を誇っていたヤコブではないのです。私は本当に神の恵みをいただくには足りない者です、ふさわしくない者ですと。（３）<u>神の前に正直に必要を述べる</u>＝１１節**「どうか私の兄、エサウの手から私を救い出してください。彼が来て、私をはじめ母や子どもたちまでも打ちはしないかと、私は彼を恐れているのです。」**と、神に対して正直です。自分の心を神の前に正直にさらけ出すのです。（４）<u>再び神の約束に立つ</u>＝１２節**「あなたはかつて『わたしは必ずあなたをしあわせにし、あなたの子孫を多くて数えきれない海の砂のよう**

にする。』と仰せられました。」、つまり、ヤコブはここで神はこのような約束をなさった、私の心は本当に恐れています、私はあなたの祝福をいただく資格のない者です、でも、あなたの約束をぜひ覚えてください、私はあなたが約束を守られる神だということを信頼しますと言っているのです。こんな人物に彼は変えられて行くのです。これまでのレッスンは決して無駄ではなかったのです。これまでの様々な苦難は無駄ではなかった、ヤコブは確実に成長したのです。このように神を信頼する者になったのです。恐れの中にあって神に期待をおく者になっていたのです。

あわれみ深い神はそのヤコブに何をされたのでしょう？３２：２２**「しかし、彼はその夜のうちに起きて、ふたりの妻と、ふたりの女奴隷と、十一人の子どもたちを連れて、ヤボクの渡しを渡った。」**、ヤボク川を越えて行くのです。いよいよカナンに入ろうとするのです。そして、２３－２４節**「彼らを連れて流れを渡らせ、自分の持ち物も渡らせた。:24 ヤコブはひとりだけ、あとに残った。」**と、ヤコブはヤボク川をまだ渡っていませんでした。カナンの地に入るその前です。そのとき、２４ｂ節**「すると、ある人が夜明けまで彼と格闘した。」**とあります。よく見てください、ヤコブがだれかを捕まえてその人と格闘したのではなくて、ある人がヤコブと格闘したのです。この「ある人」は目的をもってこのようなことをしているのです。この格闘には目的があったのです。私たちはこの「ある人」が主の使いであることを知っています。もっと正確に言えば、肉体をもってこの世に来られる前のイエス・キリストであると。その方がヤコブと格闘をするのです。どんな目的をもっていたのかというと、この人はヤコブにヤコブには神の力が、神の助けが常に必要である、あなたはそれほど弱い無価値な者だということを教えることでした。そうです。神は私たちをどんどん砕いてくださるのです。神に信頼すると私たちは言いそのように生きていても、私たちは毎日の生活を通してもっともっと砕かれて、なお神が必要であり、すべての点でもっと神の助けが必要であると、私たちは学んで行くのです。なぜなら、私たちの中にはまだ自分の知恵も捨てたものではない、自分の力も捨てたものではないと、自分の知恵や力に頼る、そのような罪が残っているからです。神はそれを私たちから取り除いて行くために私たちを砕き続けてくださるのです。

こんなすばらしい祈りをしたヤコブですが、彼はまだ神の前に砕かれて行くことが必要だったのです。このある人がヤコブを格闘したのです。**「夜明けまで彼と格闘した」**とあります。まさに、この暗闇の中での格闘はヤコブ自身の歩みを現わしていないでしょうか？恐らく、夜が明けるから去らせなさいと言ったのはこの後でヤコブ自身が告白します。この場所はペヌエルだと…。３０節に**「そこでヤコブは、その所の名をペヌエルと呼んだ。「私は顔と顔とを合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた。」という意味である。」**とある通りです。神の御顔という意味です。ですから、暗闇なら見えないけれど明るくなったら見えます。ですから、神はあわれみのうちに、神の御顔がまだ見えないうちに、このヤコブと目的をもって格闘されたのです。２５節に**「ところが、その人は、ヤコブに勝てないのを見てとって、ヤコブのもものつがいを打ったので、その人と格闘しているうちに、ヤコブのもものつがいがはずれた。」**と書かれています。力関係を言っているのではありません。この人がヤコブよりも力が弱かったと言っているのではないのです。ここで言われているのはヤコブの頑なさ、ヤコブの愚かさです。ヤコブはいつまで経ってもレッスンを学ばないのです。ヤコブは、いつまで経っても私は神と戦えない、私は神に降参しなければいけない、神の力がいる、神の助けがいるということに気付かないのです。神にゆだねることをしないで、まだまだ彼自身は自分の力に頼っているのです。それで神は彼の足の関節、腰のところを打つのです。そうすると、彼は歩けなくなった、それほど私たちは神の前に弱い存在なのです。そのことはヤコブが知らなかったのです。ヤコブの中にまだ自分でやれるという思いがあるのです。神の助けが必要だということに気付かないのです。

２６節**「するとその人は言った。「わたしを去らせよ。夜が明けるから。」しかし、ヤコブは答えた。「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださらなければ。」**と彼は答えます。彼には祝福が必要だったのです。そして、彼は徐々にこの人がだれであるかが分かって行くのです。ここでヤコブが学ばなければいけなかったことは、彼自身が主の前に砕かれて謙虚に主の導きを待つことです。また、神の力と助けに信頼をおいて歩むことを彼は学ばなければならなかったのです。皆さん、ここで重要なことが起こっています。２７－２８節**「その人は言った。「あなたの名は何というのか。」彼は答えた。「ヤコブです。」:28 その人は言った。「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたは神と戦い、人と戦って、勝ったからだ。」**と、名前が変わるわけですが、ヤコブという名前の意味を思い出してください。押しのける者であり、だます者でした。ここで主の使いはあなたの名は**「イスラエルだ」**と、つまり、神のための戦士なのだと言うのです。このレッスンを通してヤコブが学ばなければいけなかったことはこういうことです。これまでのヤコブの人生はいつも神と争っていました。しかし、今度は神のために争う者にならなければいけない、そのことです。これは私たちも同じように学ばなければいけません。私たちも日々の生活において、信仰者としての歩みにおいて、神と争っていることがきっとあるはずです。神のみこころに対してどうしても従いたくないと…、その争いを止めなければいけません。私たちは神のために

戦う戦士なのです。戦う者たちなのです。ヤコブはここでそのことを教えられるのです。どれほど神はあわれみ深いかです。このような、私たちと同じように弱い者であったヤコブにこのように働いて、このように神は愛をもって忍耐をもってあわれみをもって鍛えて行ってくださったのです。そして、あなたはイスラエルだと言われたのです。

もう一つ、彼はこんなすばらしい体験をするのですが、この後を見ると、残念なことに悲劇が彼に訪れます。自分の娘が強姦されてしまうという出来事が起こるのです。シェケムへと彼らは進んで行くのです。恐らくもっと西の方に進んで来たのでしょう。ちょうどヨルダン川に近いところです。そこでこのハモルの息子シェケムが彼女を犯すという出来事が起こります。私たちの疑問は、なぜヤコブはベテルにすぐに移動しなかったのか、なぜここに留まったのかです。その答えを見ることはできませんが、少なくとも私たちが言えることは、このシェケムの人々はこのような罪を犯しても何の罪悪感ももっていません。そのような人々でした。そして、どういう理由か分かりませんが、ヤコブたちはそこで生活すること、ともに過ごすことが問題とは感じなかった、そこでの生活が快適になったのかもしれません。３４章を見ると、この大変な悲しみの後、彼女の二人の兄たちがハモルの子シェケムとその町の人々をみんな殺してしまうという、そのような出来事が起こるのです。霊的にダウンしてしまった、霊的に落ちてしまったのです。すばらしい体験をしたヤコブはこのような非常な悲しみに陥ります。３４：３０に**「あなたがたは、私に困ったことをしてくれて、私をこの地の住民カナン人とペリジ人の憎まれ者にしてしまった。私には少人数しかいない。彼らがいっしょに集まって私を攻め、私を打つならば、私も私の家の者も根絶やしにされるであろう。」**と、このように言っています。

その後、神はヤコブに言われます。３５：１**「立ってベテルに上り、そこに住みなさい。そしてそこに、あなたが兄エサウからのがれていたとき、あなたに現われた神のために祭壇を築きなさい。」**と。ベテルはこのシェケムよりも南にあります。普通なら下りなさいと言うはずです。**「ベテルに上りなさい」**という表現を使ったのは恐らく、確かに、海抜ではベテルの方が約３００メートルほど高かったのでそういう意味もあるのでしょうが、霊的な意味があるのでしょう。霊的に大変な状態になってしまった、罪を犯して霊的にダウンした状態にあって、神が言われたことは**「ベテルに上りなさい」**、もう一度思い出しなさい、あなたはベテルでどんな約束を受けたのかを、あなたの神はあなたとともにいてあなたを守る、あなたを約束の地にもう一度連れ戻すのだという約束です。そこで、３５章を見ると、そこに入って行くために２－３節**「それでヤコブは自分の家族と、自分といっしょにいるすべての者とに言った。「あなたがたの中にある異国の神々を取り除き、身をきよめ、着物を着替えなさい。」**と神に会う備えをしなさいと言うのです。神を心から礼拝するのにふさわしい心と態度をもつようにと言います。つまり、このことを通して、ヤコブのその霊的にダウンした状態を神は引き上げてくださったのです。霊的に落ち込んだときどうすればいいのか、神を恐れて崇めることです。そして、ここで再び神はヤコブに対して１０節**「あなたの名はヤコブであるが、あなたの名は、もう、ヤコブと呼んではならない。あなたの名はイスラエルでなければならない。」**と、そのことを言われるのです。

このヤコブという一人の人物が神によって訓練を受けました。確かに言えることは、これだけの訓練が終わって、では彼は罪を犯さない完璧な人間になったのかというとそうではありません。残念ながら私たちと同じように弱さを持ち罪を犯します。でも、皆さんにぜひ見ていただきたかったのは、神はこのようにこのヤコブという信仰の勇者を訓練していったことです。いろいろなことで落ち込むことがある、どうすればいいのか、主をしっかり見上げることです。いろいろなことで問題を抱えることがありますが、主を覚えることです。いろいろなことで恐れをいだきますが、主を覚えることです。そして、霊的に落ち込むことがあれば主を崇めることです。私たちに必要なことはしっかり神を見上げること、しっかり神を崇め心から主を礼拝することです。そのときに、私たちはその様々な問題に対して勝利を得ることができるのです。自分のことだけを考えていたヤコブ、しかし、神は彼を信仰の勇者とされました。神にとって役に立つ、そんな戦士と変えられました。ですから、思い通りに物事が進まないとき、様々な問題に遭遇するとき、恐れを抱くとき、私たちはその問題や恐れから逃げてはだめなのです。神はすごいことを言われました。３５：１１を見てください。**「神はまた彼に仰せられた。「わたしは全能の神である。」**と。エル・シャダイ、神はそのように言われたのです。どんなことでもできる神、それがわたしだと。ヤコブをこのように変えることができました。あなたを変えることができます。クリスチャンの皆さん、今あなたがどこにおられるのか分かりません。でも、神はあなたへの訓練を止めておられない、神はあなたが役に立つ者に変わって行くことを望んでおられるし、その訓練を与え続けてくださる、問題はあなたがその訓練を受けるかどうかです。神はあなたを変えることができます。エル・シャダイ、全能の神です。神に逆らっておられる方、まだ罪の中を歩んでいる方、神はあなたを新しく生まれ変わらせることができます。この方にはできるのです。なぜなら、この方はエル・シャダイ、全能の神だからです。必要なことは、その方の前にあなた自身が謙虚になって出て行くことです。主よ、私を

救ってください、主よ、私を助けてくださいと…。